

# VEとの出会いから現在まで

早稲田大学 名誉教授  
小泉 淳



私がVEと初めて出会ったのは、2003年10月でした。日本VE協会の宮本事務局次長（現・理事、事務局長）が私の研究室に来られ、「早稲田大学理工学部の社会環境工学科および大学院理工学研究科の建設工学専攻に、VEの寄付講座を設置したい」というお話をされたことに始まります。

それまで私は、VEとは製造業や経営学などの分野で使われる工学、といった漠然とした知識しか持ち合わせておらず、「なぜ土木の分野に?」というのが第一印象でした。とはいえ、せっかくのご提案に応えたいと思い、すぐに大学に寄付講座の科目申請を行い、2004年4月から学部は3年生、大学院は1年生を対象としたVE講座が始まりました。

設置期間は2004～2006年の3年間で、この間の受講者は255名、うち133名がVELの資格を取得しました。当初、講座は2006年9月の終了を予定していましたが、あまりにも人気が高いことから、日本VE協会に寄付講座の延長をお願いし、さらに2年間の継続を認めていただきました。

その後、2008年9月に寄付講座は終了しましたが、私はVEの講座をもっと続けたいと思い、その旨を大学に申請したところ、「科目の新設はできないが、寄付金の残額以内であれば続けてよろしい」との許可が下りました。これにより、以後は節約しながらも、私が定年で退職する2017年度まで講座を続けることができたのです。

2004～2017年までの14年間で、受講生は800人強、VELは400人弱となりました。これほどの人数がVELとして、また、資格は持たずともVEの考え方を理解して社会に出ていることを思えば、非常に有意義な講座であったと感じています。日本VE協会とともに、14年間にわたって講師を務めていただいたCVSの黄逸鴻先生（KOU VALUE

PROFESSIONAL OFFICE 代表）に深く感謝し、御礼を申し上げる次第です。

話は変わりますが、日本VE協会誌No.310に「VEの進化への試見（1）」という考察が載っています。そこには各国におけるVEの定義が示されていますが、本質的な考え方は同じでも、VEの定義が1つではないことに今さらながら驚きました。

私の専門分野「土木」において、私なりにVEを定義すれば、「同じ価格であるならば、より優れた品質のものを。同じ品質であるならば、より価格の安いものを」となります。もちろん、目指すところは「品質が高く、しかも経済的で合理的なもの」ですが、それが達成されれば、さらにその上を目指し、どんどん技術が発展することになります。

土木分野では、建設工事の発注者の多くが役所となっていますが、大きな建設工事では技術提案方式という発注制度がよく使われます。この提案方式の中に、工事の受注後にVEと称して受注金額を低減するための提案を求める、いわゆる「受注後VE」があります。せっかく受注した工事の工費を受注者自らの手で減額させるもので、受注者が有する技術の蓄積やノウハウなどをまるで無視した、とんでもない話です。日本の役所が求めるのは、常に「品質はともかくも、もっと安いものを」です。

最近、国土交通省の地方整備局や地方自治体の一部にVEが浸透しつつありますが、「土木工事の価格を安くさせるための手段がVEである」と捉えている役人はいまだ多いように思われます。土木工事に使われる原資の大部分が税金であることを踏まえれば、特に土木分野ではVEの正しい考え方を広く伝えていくことが重要であり、VEの土木分野への今後の普及に大いに期待しているところです。

（筆者は当会理事）